Moment of Silence for 2011.03.11

*吉　川　和　夫

KIKKAWA　Kazuo

要　旨

2011年に作曲したピアノ連弾曲 ”Moment of Silence for 2011.03.11” について、成立の契機と作曲意図、作品分析について述べ、同作品の全曲楽譜を掲載する。また、関連する作品についてのデータを記す。

Key words：作曲、コンテンポラリー・ミュージック、ピアノ連弾曲、東日本大震災

1．はじめに

2011年３月11日の東日本大震災発災後、音楽で被災地を元気づけたいという活動が数多く起った。一時期には、被災地の学校や避難所、仮設住宅集会所等へのコンサート開催希望が殺到し、避難所の世話役や学校幹部を多忙にさせた。それでなくても多忙なこの人たちは、しかし音楽を携えての訪問が、被災地の人心に一時でも潤いをもたらすことを承知していたので、可能な限り訪問を受け入れた。そこには、自己満足的、売名行為的な行動や、被災地へのボランティア訪問にあるまじき要求を突き付けるふるまい、営利目当てのもくろみも交じっていたにせよ、多くは音楽をもって被災地の人々の心の復興に寄与したいという善意の行為だった。そして、被災地復興応援活動の捉え方が真剣であればあるほど、訪問者は「被災地に対して音楽で何ができるか」という自問によるジレンマに囚われた。だがそうした自問は、眼前の被災者たちの姿と訪問者である自分との距離感を真剣に測ろうとすることの軌跡でもある。「音楽の力」という、震災直後から盛んに語られ、今では当たり前に使われるようになったフレーズが、実際にはどのようなことを示すのか、正確に説明するのは難しい。音楽に人の心を動かす「力」があることは確かだが、それが「慰め」なのか「元気を与えること」なのか、具体的に羅列してみても、隔靴掻痒の感は免れない。まして「音楽の力」は受け取る側が「力」を感じるものであり、施す側がそれを積極的に掲げる性質のものではないと思われる。

2011年４月30日、仙台在住のピアニスト庄司美知子は、知り合いの医師の依頼に応えて、ヴァイオリニスト渋谷由美子、バリトン歌手草刈伸明とともに南三陸町歌津を訪れ、避難所となっていた泊浜生活センターで訪問演奏を行なった。その場での体験、そこで出会った少女たち（いずれも津波によってピアノを流失した）が契機となって、同年６月９日、「被災地へピアノをとどける会」が立ち上げられた。庄司が実行委員長、渋谷と筆者が副委員長となり、文字通り被災地へピアノ、場合によっては電子ピアノ、電子キーボードを届ける活動を開始した。ピアノは、全国に寄贈希望を募り、製造年数や状態をクリアしたものを仙台に運び、協力を申し出た仙台ピアノサービスの倉庫で保管しつつ、調律師阿部隆を中心に、丁寧なメンテナンスを施した。一方、仙台中央音楽センター・桐朋仙台教室に勤務していた郷古由理、鈴木由利子が実務を担当し、実行委員会全員の合議によって、受け入れを希望する被災者とのマッチングを行なった。実行委員のメンバーは、全員本務を持ちながらのボランティアであり、2018年２月現在、被災地へ届けたピアノ（電子

＊　宮城教育大学音楽教育講座

ピアノ、電子キーボードを含む）は517台を数えた。[1]

2．作品の成立経緯

「被災地へピアノをとどける会」の活動に携わり、数多く寄せられる問い合わせの中に、ピアニスト村田理夏子氏からのメールがあった。2011年７月のことである。ご主人のピアニスト、パスカル・ドゥヴァイヨン Pascal Devoyon 氏との連名であった。村田氏､ドゥヴァイヨン氏からの申し出は､「11月17日に東京で開催を予定しているリサイタルで､『被災地へピアノをとどける会』の名前で募金箱を設置したい。さらに、当日会場での CD 販売の収益の一部を寄付したい。」というもの｡何度かメールをやり取りしているうちに、筆者が作曲家であることを知り、コンサートでの被災地支援をさらに印象的に呼びかけるため、両氏のために短い作品を書かないかということになった。ただちに作曲に取り掛かり、９月29日に脱稿。ベルリン在住の両氏へメールで送付した。

初演は、11月17日、東京文化会館小ホールで開かれた「パスカル・ドゥヴァイヨン＆村田理夏子　ピアノデュオリサイタル」。コンサートの途中休憩明けに、村田氏の口頭での紹介があり、演奏された。作曲を依頼された時には、コンサートの印刷物等はすでにできあがっていたので、残念ながら印刷された記録等はない。その後、庄司美知子、藤井隆史、白水芳枝、ゲルティンガー祥子、榊原紀保子、寺田悦子、渡邉規久雄、常世千寿子 mages、美濃純子各氏といったピアニストによって演奏されている。

3－1．作品について①　概説

”Moment of Silence for 2011.03.11” というタイトルを直訳すれば、「沈黙（静寂）の時～ 2011年３月11日に寄せて」となるだろう。作曲の着想から言えば、” Moment of Silence” は「黙祷」を意味する。筆者は、作品ノートとして次のように述べた。

「３月11日のために、何度黙祷をしたことでしょう。最初の黙祷は、まだガスも水道も通らぬ勤務先の大学の震災後初の教授会でした。１週間目、１ヶ月目、仙台のコンサートホールが再開された７月２日、６ヶ月目…。そのたびに、あの寒く恐ろしい、悲しみに包まれた日を思い、胸が熱くなります。この連弾小品は、村田理夏子さん、パスカル・ドゥヴァイヨンさんからお声がけ頂いて作曲し、お二人に献呈させて頂くものです。震災が自分にとって何であるのか、それを音で語ることばを私はまだ持ちません。しかし、時が止まった黙祷の間に感じること、去来する思いを少しだけでも書き留めておきたいと念じました。」

黙祷の時間は、宙づりの時間である。時計の秒針は進むが、感覚としての「時」は止まっている。というより､止めようとする行為だ。死者との距離を近くし、言葉にならない言葉を投げかけるために、瞑想のうちに、意図的に生の「時」を止めるのである。

3－2．作品について②　楽曲分析

この作品は、以下の３つの部分からなる（［　］内の数字は小節番号）。

［1］－［20］（20小節）

使われている音は、ホ調自然短音階と一致するが、ところどころ e-g-h の短３和音が響くことはあっても、ホ短調の機能和音構造は指向しない。La の旋法を、e 音が中心音となるよう移高したものとも言える。セコンド・パートのバスには、e 音がオスティナートとして響き続ける。e-g-h 短３和音の第３音 g は、しばしば fis 音に揺らぎ、短３和音としての安定を拒む。プリモ・パートはト音から２点イ音に跳躍から開始するが、冒頭4小節までの旋律に現れる９度以上の跳躍が作品の性格を特徴づけている。８小節目までは pp だが、９小節目の f の突然の出現をきっかけに、強度は不安定となり、即興的なパッセージが広がっていく。

1　http://www.piano-donation.org/　「被災地へピアノをとどける会」HP
2018年６月９日をもって活動は終了した。ただし、受け入れ側の事情により、未だ寄贈できない数件のために、窓口は一応開いている。

旋律線に順次進行は少なく、跳躍を多用するためにジグザクな線を描いていく。この間も、セコンド・パートはppからpを維持し続ける。

[21] − [40]（20小節）

前の部分から明確な区切りがあるわけではないが、使われる音は次第に多様になっていく。特にプリモ・パートでは3度音程が現れるものの、特定の調性への志向を持たない。27小節目からは3連符が現れる。相互に調性関係をもたない3度音程の3連符による連打によって、それまでの抑制された流れから、一気に不安定に揺れ動く。セコンド・パートは、25小節目からバスのオスティナートが1オクターヴ低く下がり、上声部には長3、長7や短6の音程が現れ、34小節目以降はプリモ・パートとストレスを起こすリズムで緊迫感を構成していく。39-40小節目に至って、プリモ・パートが最高音に達するのと同時に、セコンド・パートはすばやいパッセージとともに下2点ロ音まで墜落する。スフォルツァンティシモを付けられたこの作品における最低音は、衝撃的に鳴らされ、余韻はできるだけ長く延ばすことが望まれる。

[41] − [52]（12小節）

最低音の余韻が消える中から、冒頭と同じオスティナートが現れる。48小節目の頭までは、プリモ、セコンド両パートとも、若干の変奏はありながらも、ほぼ冒頭から8小節間を回想する。衝撃音に打たれた後で、この静謐な揺らぎはどのように響くだろうか。49-52の4小節はコーダ。E-g-h-dis-fisによる9の和音を経て、E-g-h-disの7の和音に収斂していく。静寂を醸しだす最後の和音（プリモ・パート）は、dis音が一番下に置かれているために安定することなく、むしろ陽炎のように揺らぐ響きを意図している。

3－3．作品について③　省察

「黙祷」は、祈る人それぞれの違った思いを持って行われる。同様に、この作品からどのような風景、色合いを感じ取るかは、聴く人それぞれの心に委ねられるべきである。ただ、気仙沼に故郷を持つ筆者の友人は、この作品を聴いて「被災地域に初めて立ったときの気持ちを思い出した」と語った。また、震災の影響はほとんどなかった岡山在住の友人は、「この作品に衝撃を受け、被災地を思い泣いた」と語った。受け取り方は様々であるべきだが、作曲者としては、被災地を目の当たりにした悲しみとやるせなさを感情的に訴えるのではなく、震災の不条理な虚無感を、作品の中で祈りに転化することを意図した。

4．関連作品について

この作品 “Moment of Silence for 2011.03.11” の前後に筆者は、東日本大震災を契機とした音楽作品を作り続けている。2011年から2017年までに作曲し発表した作品について、初演等のデータを記しておく。

(1)「だれが　わすれた」
直江学美（ソプラノ）、遠藤文江（クラリネット）、倉戸テル（ピアノ）
2011年4月24日、石川県文教会館ホール

(2) Moment of Silence for 2011.03.11
パスカル・ドゥヴァイヨン、村田理夏子（ピアノ）
2011年11月17日、東京文化会館小ホール

(3) Lamentation ／ Consolation
日比野裕幸（指揮）、宮城教育大学交響楽団
2012年3月11日、仙台市青年文化センター・コンサートホール

(4) 女声合唱曲「光」（詩：まど・みちお）
歌おうNIPPONプロジェクト（カワイ出版）により、WEB上で公開

(5) 女声合唱曲「泣いているきみ」（詩：谷川俊太郎）
Harmony for Japan vol.1、パナムジカより出版（2012年3月1日）

(6) 混声合唱のための「どうして　あんなに」（詩：まど・みちお）
田中信昭（指揮）、村上真津江（ピアノ）、合唱曲を委嘱する会 “岩国”
2012年4月22日、岩国市・周東文化会館パストラルホール
田中信昭（指揮）、東京混声合唱団、2013年3月26日、東京文化会館小ホール
NHK-FMにより放送、全音楽譜出版社から出版（2013年11月15日）

(7) 合唱曲「青い蝶」（詩：水月りの）、「悠久の時」（詩：原田勇男）

混声合唱組曲「希望の灯火」（八島秀との共作）の２曲として作曲。
北村裕子、渡部ジュディス（ソプラノ）、佐藤園子（アルト）、松尾英章（テノール）
大崎健二（バリトン）、渡辺真理（ピアノ）、渡部勝彦（指揮）
2013年９月６日、韓国･大邱文化藝術會館琵琶ホール
2013年９月18日、仙台電力ホール

(8) ヴァイオリンとピアノのためのソナタ風幻想曲 “SANRIKU”
山田百子（ヴァイオリン）、寺嶋陸也（ピアノ）
2014年10月30日　東京・すみだトリフォニー小ホール

(9) ヴァイオリンとピアノのための幻想的小品 “NAIWAN”
水野佐知香（ヴァイオリン）、寺嶋陸也（ピアノ）
2016年７月23日　東京・すみだトリフォニー小ホール

(10) 宮澤賢治の文語詩による無伴奏男声合唱曲「修羅のなぎさ」（詩：宮澤賢治）
千葉敏行（指揮）、合唱団パリンカ、2017年６月25日、東北大学川内萩ホール

５．文献

まど・みちお全詩集＜新訂版＞　理論社　2001年
新修宮澤賢治全集第６巻 詩５　筑摩書房　1980年
谷川俊太郎詩集「私」 思潮社　2007年
原田勇男「東日本大震災以後の海辺を歩く　みちのくからの声」未來社　2015年

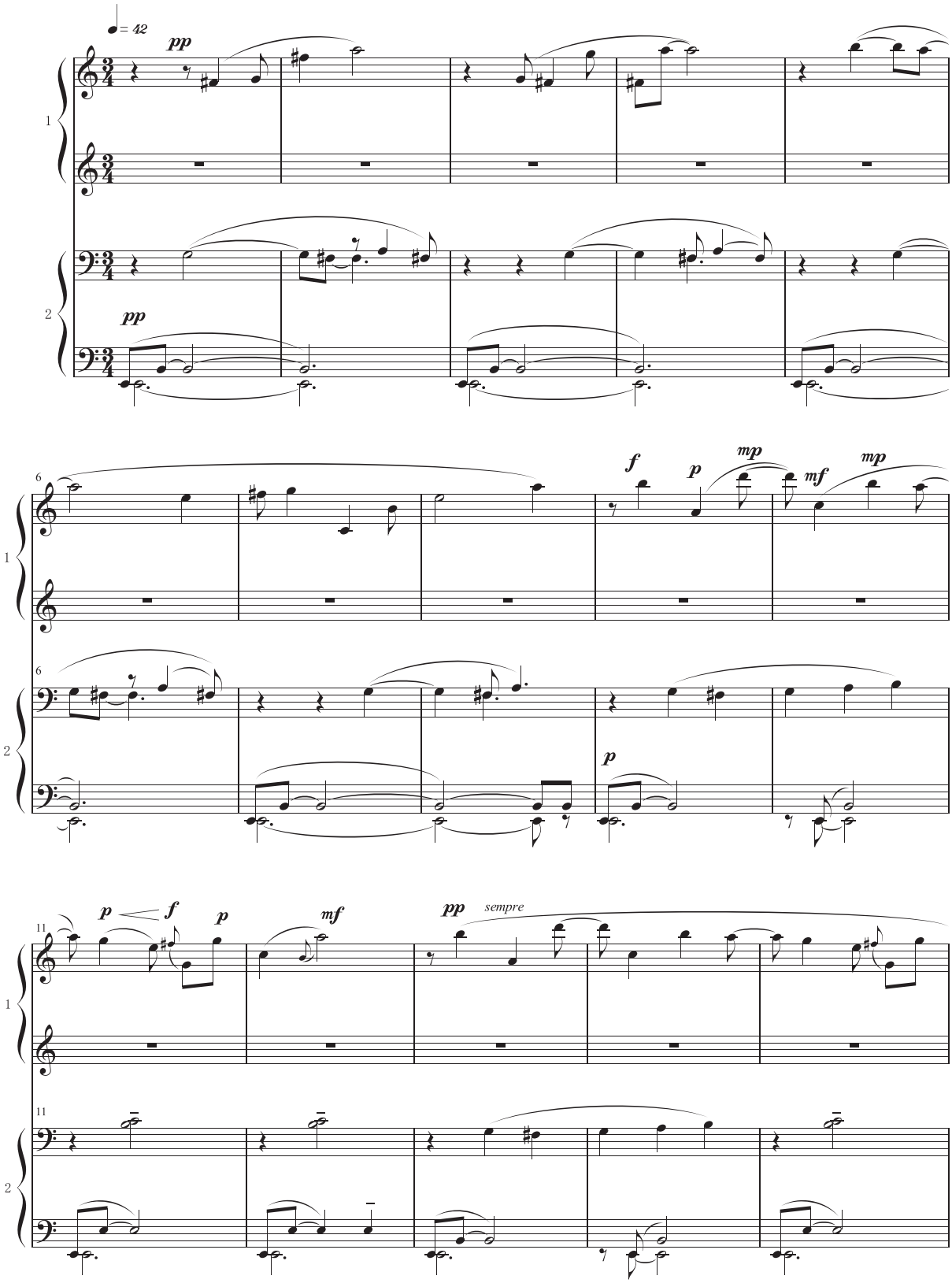
（平成30年９月28日受理）

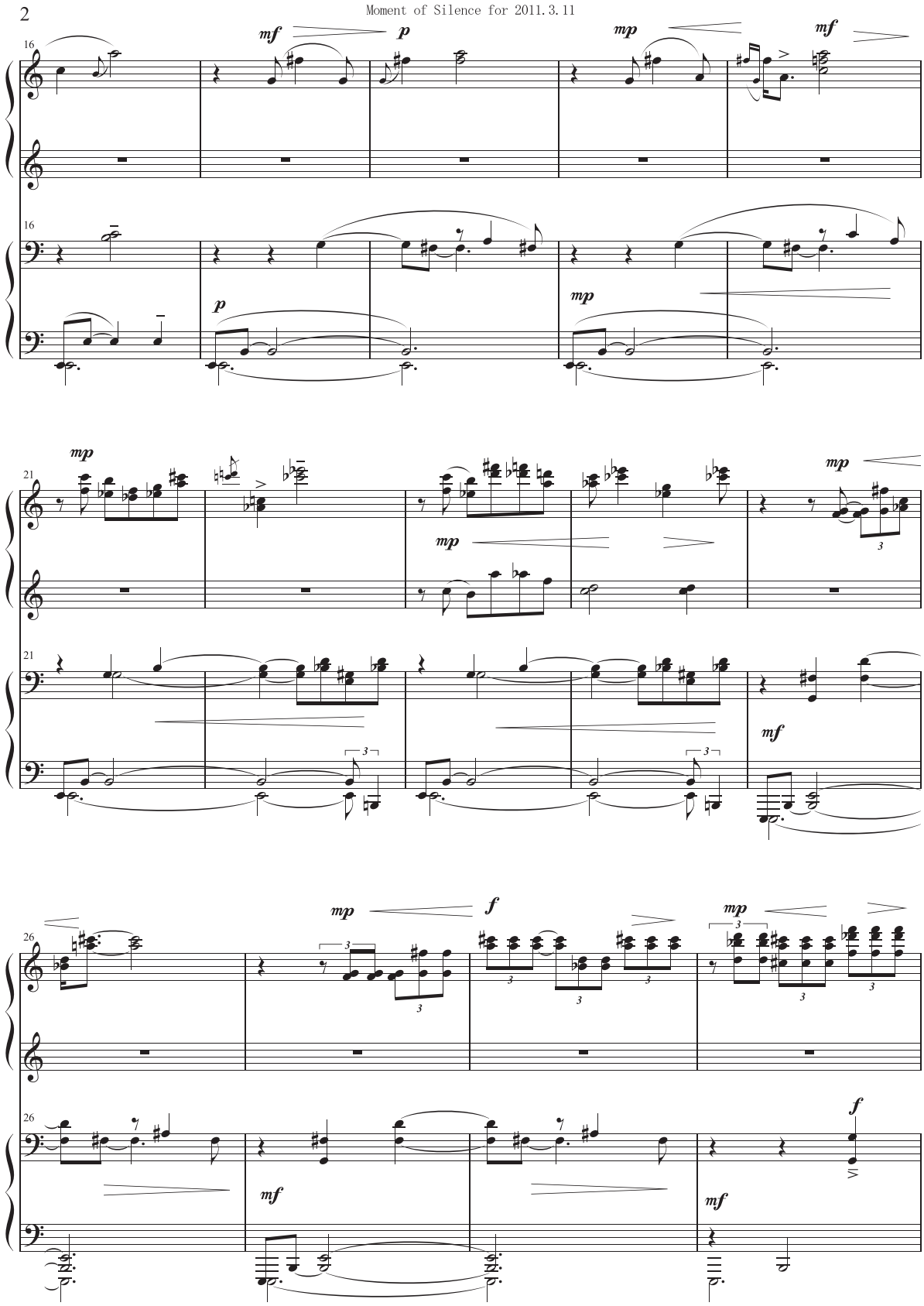
To Mrs. RIKAKO MURATA, Mr. PASCAL DEVOYON

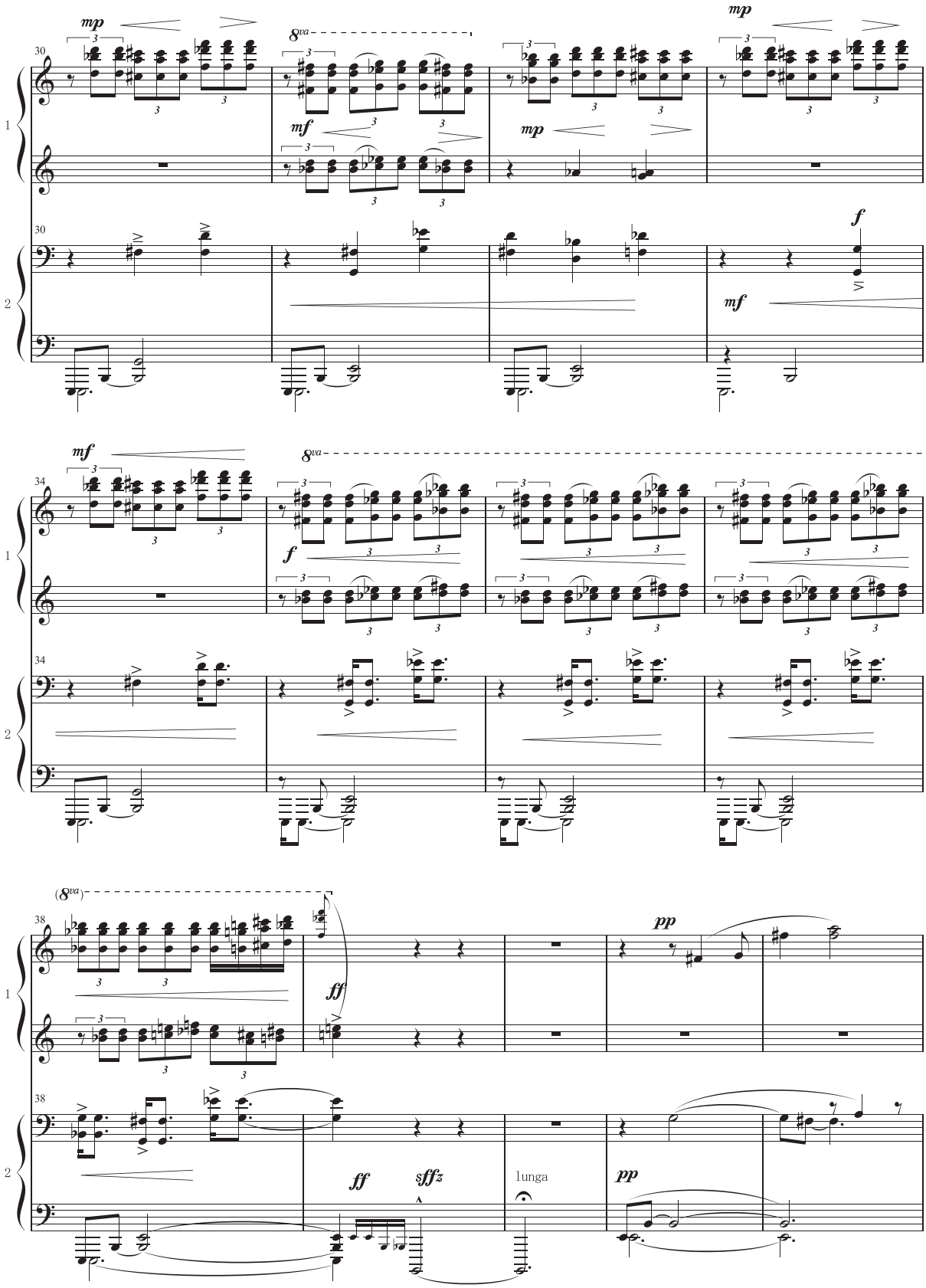
Moment of Silence for 2011.3.11

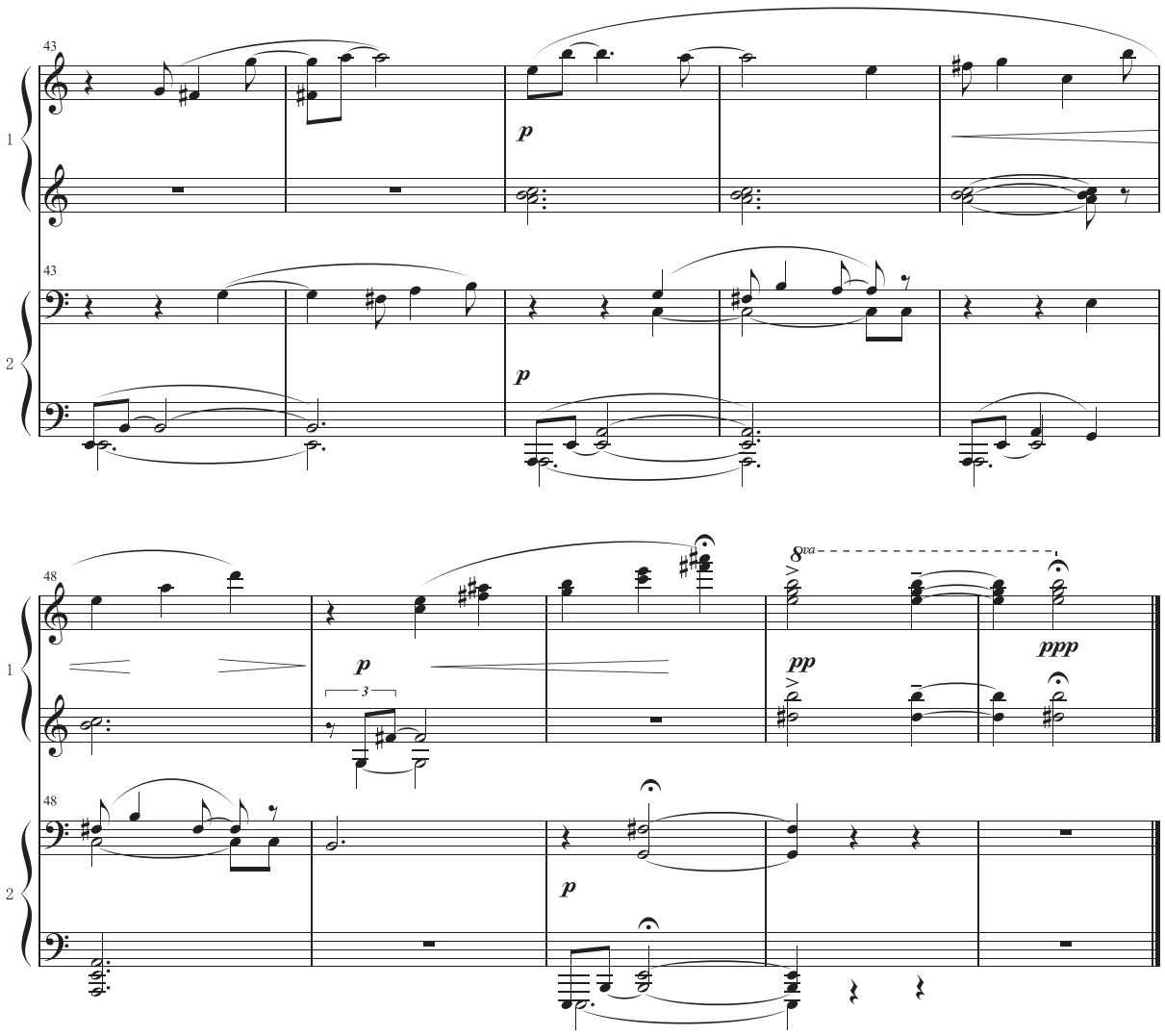
Piano Duo

吉川 和夫
KIKKAWA Kazuo




2
Moment of Silence for 2011.3.11
16
mf
p
mp
mf
1
2
p
mp
21
mp
mp
mp
mf
26
mp
f
mp
f
mf
mf


mp
8va
mf
mp
mp
f
mf
mf
8va
f
(8va)
ff
pp
ff
sffz
lunga
pp


43
1
p
43
2
p
48
1
p
3
pp
ppp
8va
48
2
p